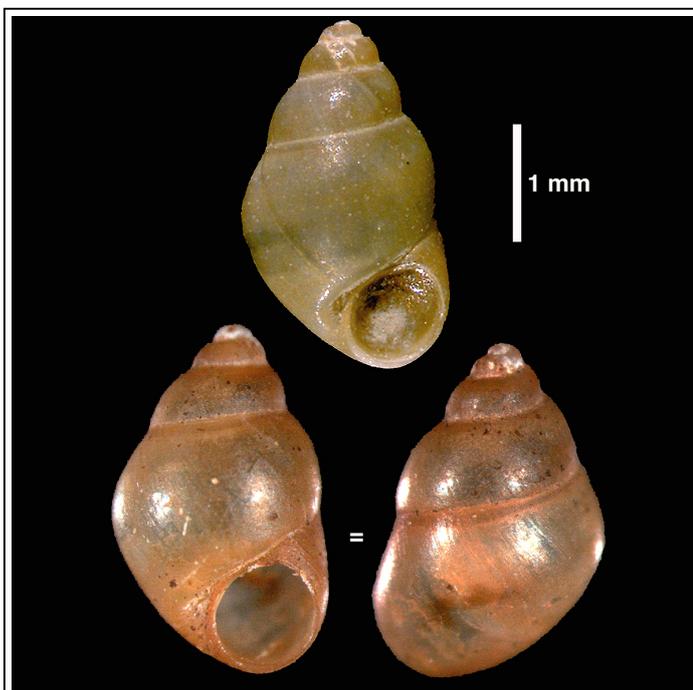


エドガワミズゴマツボ *Stenothyra edogawaensis* (Yokoyama)

【選定理由】

本種は、内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺や、それより下部の泥干潟の表面に生息する。県内ではヨシ原湿地や泥干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。



上段: 名古屋市庄内川河口, 2008年7月13日, 下段: 豊橋市汐川干潟, 2001年8月5日, 木村昭一採集

【形態】

殻は殻長約 2 mm と微小であるが、殻質はやや厚く堅固。殻は体層に向かって下ぶくれの卵形。十分に成長した個体では殻口は狭まり円形。蓋は石灰質で厚い。臍孔はない。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村 (1999) を含めて現在約 15 カ所である。生息場所では群生し、個体数は多い場合が多い。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。宮城県万石浦・若狭湾～九州まで分布する(福田, 2012)。沖縄島から近似した個体が知られているが同種か否かは検討の余地があり、朝鮮半島からの記録は未記載種トライミズゴマツボ *S. sp.* の誤同定である(福田, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

県内では上述したようなヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息している。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地や内湾奥の泥干潟が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

上述したようなヨシ原湿地や泥干潟を保全することはいうまでもなく、周辺水域の水質も保全する必要がある。

【特記事項】

県内では、庄内川河口域(木村, 2000)のように潮間帯中部から下部の泥干潟の表面にカワグチツボ *Fluviocingula elegantula* (A. Adams) と同所的に生息している場合が多い。本種にはウミゴマツボ、ミヤジウミゴマツボ、ミジンウミゴマツボ、ミヤジマウミゴマツボの別名がある。

【引用文献】

福田 宏, 2012. エドガワミズゴマツボ, p. 44. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌 54: 44-56.

木村昭一, 2000. 藤前干潟で採集されたワカウラツボ. かきつばた, (27): 14-16.

(木村昭一)